

桜蔭俳話会九月句会(第三〇八回)秀句鑑賞

【秀句鑑賞】

叛く子と対峙の母や夜の百足

幸

子と対峙しているのが母親であって父親ではない点が少し気に懸るが、子と日常的に接するのは、「生きる糧を得る」ことを大義名分として、毎日帰宅が遅く出張で家を空けることも稀ではない父親と比べれば、母親であるから、仕方がない。父親が働き盛りの家庭は疑似母子家庭といってもよい。子の種々の不満や煩悶は身近の母親に真っ先にぶつけられる。

百足が出た日の夜も口を尖らせた子との間で一悶着があったのであろう。そこに百足が現れることによって、母子の熱い応酬に水が差され、母子は一緒になってその百足に対峙したのである。対峙対象の転換を句の中心に据えたのが手柄である。なお、「百足」は夏の季語である。

【秀句鑑賞】

巡回の猫の気配やみだれ萩

秀一

俳味に優れた一句である。萩の咲き乱れる区域を縄張りとしている猫がおり、その猫が縄張りの見回りに来ると言っているのである。しかも、現実には猫の姿を見たと言っているのではなく、萩の枝葉を揺らして猫が立っていたかも知れないガサガサという物音に、猫がやってくる気配を感じたのである。もっと言えば、作者は、そのような物音が一切ない状態でも、萩の乱れように「猫が来る気配」を感じたのかも知れない。

【秀句鑑賞】

玉入れの玉また逸るる野菊晴

貞勝

菊薫る時期は各所で運動会が開かれる時期でもある。歳時記では、野菊（野菊晴）と運動会は別々の季語として秋に分類されている。作者は、運動会の代表的な演目の一つである「玉入れ」を運動会の象徴として抽出することによって、菊と運動会を同じ一句に取り込んでいる。しかも、「玉が網に入る」と単純に述べるのではなく、「玉がまた逸れる」と言うことによって、野菊晴のもとで運動会が和気藹々とのびやかに行われている様子を活写している。

【秀句鑑賞】

捨て舟に鳥の休める残暑かな

友子

「捨て舟」を背景に設定したのは、いかにも古典的な手法ではあるが、残暑の度合いをより如実に表現するためのお膳立てとして、「捨て舟に休む鳥」に目を付けたのは上手い。鳥だけでなく、人間もまた夏休みを再びとりたいような暑さであった。

【秀句鑑賞】

針の目の見えて見えぬや秋の夜

ツル子

「目に見えているのに見えない」という言い回しが良い。しかも、対象とするものが、「針の目」であれば、そのもどかしさが実感として読者にストレートに伝わって来る。夜、針仕事をする女性ならではの句である。男性の評者は、しよぼつく目を奮い立たせてパソコンのキーボードを叩くとき、目的のキーと一緒に隣のキーも押してしまったときに、ひたひたと寄せ来る老いの波を感じる。

#### 【秀句鑑賞】

幻想のひとつに平和鬼胡桃

明美

人類の長からぬ歴史を顧みるとき、平和への懸命な努力が地道に続けられて人々がほっとしたのも束の間、それが一つの欲望や誤解によっていとも簡単に破られて来たのは事実である。この希望と落胆の繰り返しを眺めてみると、「平和は幻想である」と慨嘆する作者の心境には同意する。季語の「鬼胡桃」との配合が効いている。

#### 【自句自解】

原発の廃棄宣言秋の虹

守

秋の虹は直ぐに消える。儂いものの象徴である。原発ゼロを発表したかと思えば、許可済み原発の建設再開を容認するなど、政府の方針は腰が据わっていない。経済の発展と国民の健康は別次元のテーマであり、一つの天秤の両側の皿に載せて、比較衡量するべき問題ではない。原発推進派は経済発展への悪影響を脅しの材料に使っている。未来の児孫のために本句の予測が現実とならないことを望む。

#### 【添削コーナー】

秋彼岸孫の背丈を告げてをり

ツル子

原句の平叙文の形でも句の言わんとするところは十分に伝わりますので、これはこれで良いと思いますが、助詞の「を」を使いますと句が説明的に流れる傾向があります。そこで「を」を消してフレーズの順番を入れ替え、次のようにすることもできます。

告げぬしは孫の背丈よ秋彼岸

これによって故人との対話の主題が「孫の背丈」であることがより中心に据えられ、句に韻文としてのリズム感が出て来るように思います。